

日本におけるカトリシズムに基づく 教育に関する宗教学的考察

—シャルトル聖パウロ修道女会来日の背景についての一考察—

佐々木 裕 子
小 林 淑 子

1. はじめに—日本における宗教系学校及びその教育に関する研究

日本においては宗教教育、あるいは宗教系学校の教育に関する研究は、教育学と宗教学の間にあり、長い間タブーの研究分野であった。宗教教育という言葉自体が頻繁に取り上げられるようになったのもオウム真理教の事件後のことであり、本格的な研究プロジェクトが宗教学、とりわけ宗教社会学の分野で始まったのは、井上順孝らを中心とした調査研究以降である¹。この研究はいわゆる「宗派教育」の視点からの研究ではなく、国内の宗教系の学校における実際の宗教教育を網羅的に、また、学生や生徒の宗教意識を実証的に調査研究したものであった。また、キリスト教系教育に関する研究をみると、プロテスタント系学校に関する研究はかなり早い時期から始まりまとまった成果が出ているが、カトリック系学校や教育についての研究はさほど進んでいない。これには幾つか理由が考えられるが、一つには日本のほとんどのカトリック系学校が修道会によって担われており、修道生活の本質的霊性の一つである「無名性」から、多くの場合、厳密な記録を残す必要がなかったということ、また、それぞれの教育の理念や背景となる修道会の霊性などを検討する場合、どうしても宗教学的、神学的な理解が必要となるため、困難さを伴うということがある。

1 國學院大學日本文化研究所井上順孝監修『宗教教育資料集』、鈴木出版、1993、井上順孝責任編集『宗教と教育—日本の宗教教育の歴史と現状』、弘文堂、1997、他。

本論では、そのような宗教教育に関する研究状況を視野におきつつ、現在日本に150ある修道会・宣教会の中で、開国後の日本において三番目に来日し、カトリシズムに基づく教育を担うこととなったシャルトル聖パウロ修道女会の日本での活動の歴史的背景について検討しようとするものである。筆者たちはまず、資料を丹念に読み直すことから始めたが、修道会や学校に関する書籍や資料のほとんどはもともと記録を主眼として書かれたものではないため、様々な記述の齟齬や曖昧性に直面することとなった。まずはそれらの照合・検討を行ったが、ここでは、日本の外、とりわけ19世紀のアジアからの視点に立って、シャルトル聖パウロ修道女会の日本での教育活動の歴史につながる基礎的部分を整理すると共に、それに関連した現地調査で得られた知見を一部、紹介することにした。

2. シャルトル聖パウロ修道女会来日までの日本のカトリックの状況

1549年、フランシスコ・ザビエルによってもたらされたカトリックは信徒の数を増したが、その後の禁教令や鎖国令により、日本の歴史から姿を消すこととなった。ヨーロッパにおいてはキリシタンたちの殉教が伝わっており、日本に対する関心が高かったことが知られているが、日本の歴史の中で再びカトリックが正式に登場するのは、1858年の日仏通商修好条約を受け、それまで琉球で日本の開国を待っていたジラルー Girard, Prudence Séraphin Barthélemy らフランス人宣教師たちの来日以降となる。

幕末以降の日本のカトリックの歴史は、修道会や宣教会とのかかわりによって大きく3つの時期に分けられる。第一期は幕末から1907年までのパリ外国宣教会（Société des Missions Etrangères de Paris）が担った時代、第二期は1907年以降、フランス以外の国々の宣教会や修道会が来日して司牧を担当する時代、そして、第三期は第二次世界大戦後、世界各地から修道会や宣教会が来日する時代である。本論で扱うのは、この第一期の中の

ごく初期の部分である。キリシタン時代にはイエズス会以外の修道会も相次いで来日したが、19世紀の極東地域は、パリ外国宣教会に委ねられていた。それゆえ、この第一期に来日した修道会は全て、このパリ外国宣教会の宣教師たちの求めに従って来日したフランス系の修道会であった。すなわち、プティジャン Petitjean, Bernard-Thadée の招きにより、1872（明治5）年には幼きイエス会（旧称：サン・モール会 現在の雙葉学園）、1877（明治10）年にはショファイユの幼きイエズス修道会（現在の信愛女学院）が、また、オズーフ Osouf, Pierre Marie の招きにより、1878（明治11）年にはシャルトル聖パウロ修道女会（現在の白百合学園）が来日し、いずれも当時の日本における捨て子の養育や貧民救済などの福祉、施療院、そして女子教育といった分野で活動を始めた。

幕末以来、プロテスタントの宣教師たちが主に都市部において「お雇い教師」などのかたちで近代的な教育や技術の伝達を通して伝道したのとは対照的に、カトリックの宣教師たちは潜伏キリシタンを探しつつ、地方を宣教して歩いた。彼らはこれらの修道会の来日前にも、フランス語の私塾や、いわゆる寺子屋のような教会付属学校というかたちで小さな初等教育学校を開いていたが、当時、遅れていた女子教育の分野での働きが伸びるのは、上に述べた女子修道会が来日する1870年代以降のことである。その後、1887（明治20）年には男子の中等教育のために、マリア会（現在の暁星学園）が招かれ、東京、長崎、大阪で学校を開いた。また、1898（明治31）年には、ハンセン氏病患者の看護のためにマリアの宣教者フランシスコ修道会（現・聖母病院・海星女子学院）が、コール Corre, Jean-Marie によって熊本に招かれた²。これらのいわゆる活動修道会に加え、1896年には生涯を囲いの中で沈黙と祈りの生活に捧げる嚴律シトー会（トラピス

2 このコールの招きに応じて、1900年にシャルトル聖パウロ修道女会は熊本の八代に会員を送り、博愛医院を開設、現在の八代ナザレ園（児童養護施設）、八代白百合学園へと続いている。

ト)が、1898年には女子厳律シトー会（トラピスチヌ）が函館に招かれ、日本における観想修道会の基礎を築いた。このように、1907（明治40）年までの第一期は、フランスのみを媒介としてカトリックが伝えられることとなった、極めて特徴的な時代であったともいえる。

さて、1858年のパリ外国宣教会のフランス人宣教師の来日時は、まだ幕府による禁教令下であった。しかし、日本に住む外国人のための教会建堂は認められたことから、1862年には横浜に聖心天主堂が、1865年長崎には大浦天主堂が完成した。横浜ではこの珍しい西洋建築の瓦版なども出、日本人見物客が押し寄せたが、宣教師たちが彼らに説明を行ったことにより、奉行所によって日本人が逮捕される横浜天主堂事件が1862年に起こった³。一方、長崎の天主堂が建設された一ヶ月ほど後、浦上の潜伏キリシタンたちが大浦天主堂のプチジャンに自らの信仰を告白した。これにより、約250年にわたる禁教の下、信仰を保ち続けてきた潜伏キリシタンが多数いることが判明し⁴、このニュースは「東洋の奇跡」として直ちに海外に伝えられたが、1867年には「浦上四番崩れ」などで知られるキリシタン弾圧が始まり、再び多くの殉教者を生んだ。その後、1873年、明治政府は岩倉具視使節団に対する諸外国からの抗議や国際情勢を鑑み、キリシタン禁制の高札を撤去、キリスト教は黙認されることとなった。シャルトル聖パウロ修道女会の会員たちが来日するのはその数年後のことである。

3. シャルトル聖パウロ修道女会会員のアジアへの派遣

1696年、フランスのルヴェヴィルで司祭ショーヴェ Chauvet, Louis が貧しい村の娘たちを集めて創立したこの修道会の草創期については、すで

3 高木一雄、『明治カトリック教会史研究（上）』、中央出版社、1978、p.261-8。

4 潜伏キリシタンたちのほとんどはカトリックに戻ることはなかったが、禁教下で守ってきた信仰のかたちを現在も保ち続けている「カクレキリシタン」の人々も存在する。

に幾つもの著述があるのでここでは触れない⁵。1727年、仏領ギアナのカイエヌスを皮切りに海外に会員を派遣していたこの会の日本での活動は、1878（明治11）年5月28日、当時の日本北緯代牧区の司教であったオズーフの招きに応じて Sr.マリ・オギュスト Sr.Marie-Auguste Biard、Sr.オネジム Sr. Marie-Onésime Chalvin、Sr.カロリーヌ Sr.Caroline Troch の3名が函館に降り立った時に始まる。当時の記録によると、彼女たちは日本に着いた直後から捨てられていた子どもや病人の世話をを行ったとされる。

われわれの問いの一つは、当時の日本では孤児が多く、すでにパリ外国宣教会のマラン Marin, Jean Marie をはじめ、日本で生活を始めているフランス人がいたとはいうものの、到着早々にそのような活動を始めることを可能とした背景は何か、ということであった。また、しばしば最初の会員たちがフランスから函館に直接渡って来たかのように語られることも多いため、それを確認しておきたいという思いもあった。これらの問いを考えて行くためには、また、日本におけるシャルトル聖パウロ修道女会の活動を考えるためには、シャルトル聖パウロ修道女会のアジアにおける歴史を少し振り返ってみる必要がある。

1877年、日本北緯代牧区の司教であったオズーフが、シャルトル聖パウロ修道女会の本部に対して、会員を日本に送ってくれるよう要請したことはよく知られているが、実際にはその布石はすでにその30年前に敷かれていたといえる。1847年、初代日本教区長に任命されたパリ外国宣教会のフォルカード Forcade, Théodore Augustin が、シャルトル聖パウロ修道女会の本部に対して孤児たちや病者の世話をするために会員を派遣してくれるよう、依頼の手紙を書いていたのである。

5 シャルトル聖パウロ修道女会の歴史については白百合女子大学ホームページ中の <http://www1.blu.m-net.ne.jp/josenk/spc/index.html>（小林紀元・小林淑子作成、2010年）を参照されたい。なお、同会の創生期に関する研究としては、千葉佳子「白百合学園の源泉を訪ねて―シャルトル聖パウロ修道女会の創立史の周辺―」、『研究紀要』（白百合学園中学・高校）、1992などがある。

フォルカードについてはすでに詳しい研究がなされているので⁶、ここでは詳しく触れないが、彼は、日本の開国前の1844年、28歳の時に将来に備えて日本語を学ぶため、琉球に派遣された。当時、琉球も鎖国令下にあったことから、彼は半ば軟禁状態で十分に言葉を学ぶこともできぬまま⁷そこで2年余を過ごすこととなった。1846年、ローマ教皇グレゴリオ16世により日本代牧に任命されたため、フォルカードは琉球を離れ、翌1847年、香港で司教として叙階された。彼は香港からコーチシナ、ロンドンを経てパリに向かい、教皇ピオ9世にローマで謁見したが、まだ日本は鎖国中であったこともあり、香港の知牧を任じられた。フォルカードは渡欧前、香港に滞在中、宣教師たちから捨て子をはじめとする様々な現地の日常生活の悲惨さを聞いていたこともあり、病院や育児院や学校などを開設して彼らを養育する必要性を痛感していた⁸。そこで彼はフランス滞在中の1847年12月14日に、自分の姉である Sr. アルフォンシヌ Sr. Alphonsine (俗名 Calixte) がすでに入会していたシャルトル聖パウロ修道女会の総長宛に、香港での様々な緊急に必要な事項とそのための修道女の派遣を求める手紙を書いたのである⁹。フォルカードの姉はすでにこの頃、西インド諸島のグアドゥループ島に宣教女として派遣されていたこともあり、彼はこの修道会のことをよく知っていた¹⁰。

6 フォルカード、中島昭子・小川小百合訳、『幕末日仏交流史—フォルカード神父の琉球日記』(Forcade, Théodore Augustin, “*Le Premier missionnaire catholique du Japon au XIXe siècle*”, 1885)、中央公論社、1993。中島昭子「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」及び、小川小百合「19世紀西欧における琉球情報と宣教師」、いずれも岸野久他編『キリシタン史の新発見』、雄山閣、1996所収、他。

7 フォルカードは、6000語に及ぶ『琉仏辞典』を作成したことで知られている。

8 スール・マリ・ルチア (岩永) 編、『光は大洋を越えて』、シャルトル聖パウロ修道女会日本管区、1959、p.55。

9 メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』(Mère Marie Paul Bord, “*Mère Benjamin*”, Soeurs de St. Paul de Chartres, 1982)、シャルトル聖パウロ修道女会、1993、p.40。

10 「フォルカードはシャルトルの総長にあてて一書を送り、ことのなりゆきを説明

当時の総長メール・タイ・ブーシェ Mère Taïs Boucher は、クロゼル・ド・モンタル司教 De Montals, Claude-Hippolyte Clausel とシュロ師 Bureau, Louis François の賛意も得て、フォルカードの助言を受けてアジアに初めての会員を派遣することを決定した¹¹。1848年5月、グアドゥループ島からフォルカードの姉の Sr.アルフォンシーヌが呼び戻され、それに加えて Sr.オギュスト Sr. Auguste Gallois, Sr.ガブリエル・ジュバン Sr. Gabrielle Joubin、イギリス人会員の Sr.ルイズ・モルス Sr. Louise Morse の4人の修道女を伴ったフォルカードと、同年3月に司祭に叙階されたばかりで、やがて函館にも赴くこととなるパリ外国宣教会のムニクウ Mounicou, Pierre は、ロンドンから¹²イギリス船 Sappho に乗り、喜望峰周りで1848年9月12日、香港に到着した¹³。Sr.アルフォンシーヌは、香港での最初のシャルトル聖パウロ修道女会の修道院の院長となった¹⁴。つまり、日本の初代司教であるフォルカードの姉がシャルトル聖パウロ修道女会のアジアへの最初の宣教女となり、その責任者となったのである。

しかしながら、香港ではこれら会員たちの生活場所や方法を考え、準備した者がいなかったため、到着と同時に住む場所を探さなければならなかった¹⁵。4人の修道女たちでできることは限られていることから、フォ

し、この地に宣教女の派遣方を切に求めたのであった。フォルカード司教が、数ある修道会の中でも特に聖パウロ会姉妹の来援を要望したのは理由があった。というのは、司教の妹（ママ）が入会して、すでにグアドゥループ島で活躍していたし、会の精神もその愛徳の事業をも熟知していたので、聖パウロ会姉妹ならこの申しいでを快く引き受けてくれると確信したからであった」（スール・マリ・ルチア前掲書、p.55）。

11 メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』、1993、p.40。

12 香港滞在に関して、イギリス政府との交渉のため。フランシスク・マルナス、『日本キリスト教復活史』、久野桂一郎訳、みすず書房、1985、p.57。

13 コルネットなどをつける、当時のシャルトル聖パウロ修道女会の修道服は香港で注目を集めたようである。「この国〔香港〕にとって極めて珍しい服装をした修道女の出現は…センセーションを巻き起こした」（同上、p.106）。

14 同上、p.100。

15 メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』、p.41。

ルカードは、まずは生後すぐに捨てられ、死を待つばかりの幼児の世話を依頼した。彼女たちの手元に渡される子どもたちは食物を与えられていない者も多く、その年の終わりまでに170名の子どもを受け入れたが、その中の四分の三は瀕死の状態の子どもたちであった¹⁶。1841年に行われた最初の人口調査によると、香港の人口は7,450人、1849年であってもわずか22,000人であったことを考えると彼女たちが預かった子どもたちは決して少ない数ではないと Cheung は指摘している¹⁷。会員たちが到着した1848年から1854年の間に収容された孤児の数は1,360人であった¹⁸。会員たちは粗末な小屋を見つけ、育児院「アジュール・ド・ラ・サン・タンファンス Asile de la Sainte-Enfance」と名づけ¹⁹、捨て子を保護した²⁰。

フォルカードがこのような孤児のための活動を始めるに当たっては当時のフランスのカトリック信徒の運動を考える必要がある。当時、フランス

16 「Sisters of St. Paul of Chartres in Hong Kong」ホームページ、(参照2012/9/1)
<http://www.spcspr.edu.hk/sistershke.htm#Origin>

17 Cheung, Frederick, 'The Contribution of the Sisters of St. Paul de Chartres in Hong Kong in the Twentieth Century', "Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies" 23, Ritsumeikan Center for Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University, 2007, p.92.

18 1874年には高齢者の婦人たちのシェルターも始められた。同上、p.92。

19 メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』、p.40。

20 「…姉妹たちを待ち受けていたものは、貧困・不便な住居・欠乏がそのすべてであった。…姉妹たちはやせ細った赤ん坊を胸に抱き取って、すぐに湯浴みをさせ、きれいに洗って真っ白な下着につつま、できる限りの手当と世話を惜しかなかった。……親も、今までこうした子どもたちの始末を引き受けて金儲けをしていた商売女までも幼児を連れて来るようになった。姉妹たちは、やせ細った赤ん坊を胸に抱き取って、すぐに湯浴みをさせ、きれいに洗って真っ白な下着につつま、できる限りの手当と世話を惜しかなかった。……しかし姉妹たちの手元に渡させる子供は、かなり前から食物を与えられていないため、衰弱と病気にむしばまれ、手厚い介抱にもかかわらず死亡するものが多かった。姉妹たちは、うち捨てられた赤ん坊や幼児が無数にあるので、貧しい資力の許す範囲で、死に奪い去られた赤ん坊の代わりに他の子を引き取り、あるいは月に何フランかの養育費を約束して里子に出した」(スール・マリ・ルチア前掲書、p.55-56)。

のカトリックにおいてはサン・タンファンス (Œuvre de la Sainte-Enfance) という活動が生まれていたが、この事業は1843年にナンシーの司教ド・フォルバン・ジャンソン De Forbin Janson, C.がパリで創設した組織で、恵まれないこどもの施設のための援助会が背景となっている²¹。また、リヨンではマリ・ポリース・ジャリコ Jaricot, Marie-Pauline が、当時の中国では子どもたちが出生後すぐに捨てられることが多いと聞き及び、それに対する援助組織を作っていた²²。フォルカードとシャルトル聖パウロ修道女会は、中国で最初のサン・アンファンスの育児院を開くこととなったのである²³。香港のサン・タンファンスでは、その後も経済的な困難が生じた場合に、フォルカードやシャルトル聖パウロ修道女会の会員たちが、リヨンのサン・タンファンスの施設にも援助を呼びかけている²⁴。

また、当時、香港で日本語を学びつつ、日本の開国を待っていた一人であるパリ外国宣教会のマオン Mahon, François-Félix-Marcien は、フォルカードによって香港のシャルトル聖パウロ修道女会付司祭として任じられ、共にサン・タンファンスの仕事に励んでいた。彼はパリ外国宣教会本部宛の手紙の中で、シャルトル聖パウロ修道女会の会員たちの様子を以下のよう

… [フォルカードは] 私を修道女たちの礼拝堂付き司祭に命じました。

私は彼女等の小さい支那屋敷に住んでいます。彼女等は善良で、献身

21 メール・マリ・ポール・ボー『三世紀の生命』(Bord, Marie Paul, “Trois Siècles de Vie”, Soeurs de Saint Paul de Chartres, 1992)、シャルトル聖パウロ修道女会、1998、p.67。

22 メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』、p.39。

23 マルナス前掲書、p.491。マルナスは、フォルカードがシャルトル聖パウロ修道女会に会員派遣を要請したのは、香港にサン・タンファンスの孤児院を設ける計画を持っていたから、としている。(同、p.87)。

24 René Gobillot, “Les Soeurs de Saint-Paul de Chartres”, chez Bernard Grasset éditeur, XXVII, 1950, p.141.

的で、勤勉です。私は彼女等に毎日1フラン与えます。彼女等は私のために洗濯をしてくれ、私の衣服の修理をし、私の食物を作ってくれます。……私はこの可哀想な修道女にこれ以上与えることはできません。彼女等に与える1スウも持っていないからです。……²⁵

香港での仕事の必要性はますます拡大したが、過労のためか、1950年10月13日、Sr.アルフォンシーヌは熱病に冒され、37歳で帰天した。彼女の葬儀は香港ではかつてないほど立派なものであったとされ、階級、言語、信仰を越えて大勢の人々が集まったという²⁶。フォルカードは「姉を死に至らしめたのは愛徳にほかなりません。姉はこの美しい徳の犠牲者になってしまいました」²⁷と書いている。Sr.アルフォンシーヌの帰天16日後には、Sr.マリ・ガブリエル・ジュバンも33歳の若さで亡くなっている。

香港の3代目の院長となったSr.ルーズは事業を発展させ、香港で学校を開き、ヨーロッパ人子弟の教育のために教師たちを集め、設備を整えた²⁸。事業は拡大したが、出費もかさんだため、会員たちはフランス語を教えたり、授産所を開いたりした²⁹。また、過労状態の会員たちがより穏やかな気候の中で働けるよう、ポルトガル領マカオにも事業を広げた。サン・タンファンスの育児院も発展を続け、1849年から1853年に1,169人、1854年から1858年にかけて1,203人の子どもを収容している³⁰。

一方、フォルカードは心労と病のため1850年、教皇庁に香港教区の職の解任を求めた。しかし、それが受理された後も香港のシャルトル聖パウロ

25 1848年10月27日付のパリ外国宣教会の教師であったテッソン Tesson, Jean 宛の手紙（マルナス前掲書、p.114）。

26 同上、p.115。

27 スール・マリ・ルチア（岩永）前掲書、p.58。

28 同上、p.56-7。

29 Gobillot 前掲書、p.134。

30 同上、p.136。

修道女会の上級聖職者としてとどまり、関わりを続けていた³¹。1852年、病気のため彼は日本教区長をも辞し、香港のサン・タンファンスを全面的にマオンに託し、フランスへ帰省、パリ外国宣教会を退いた。その後、休養により健康を回復したフォルカードは、1853年、西インド諸島のグアドゥループの第二代司教として着座したが³²、その地は、かつて姉の Sr. アルフォンシーヌが働いていた場所であった³³。1861年にはフランスのヌヴェールの司教となり³⁴、その後、1872年にはエクス・アン・プロヴァンスの司教となったが、常にアジア、とりわけ日本のことに心を砕いていたという³⁵。香港を去った後も、姉が所属していたシャルトル聖パウロ修道女会との交流が続いており、やがて極東で活躍する Sr.バンジャマン Sr. Benjamin le Noël de Groussy とのやりとりも残されている³⁶。

1859年、その Sr.バンジャマンが、香港の4代目の責任者として到着し、1861年には、ヴェトナムに本部を置く、香港、中国、マカオを含むインドシナ地域の管区長となり、その後、メール・バンジャマンとして知られる

31 マルナス前掲書、p.117。

32 同上、p.119。

33 Gobillot 前掲書、p.137。

34 中村は、フォルカードがヌヴェールの司教であった時に、フランス西南部のルルド Lourdes で1858年に聖母マリアの出現を受けたことで有名なベルナデッタ・スビルー Soubirous, Bernadette に、ヌヴェール愛徳姉妹修道会への入会を勧めたことを指摘している（中島「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」p.102、及び、同「パリ外国宣教会の日本再布教計画」、太田淑子編『日本、キリスト教との邂逅』、オリエンツ宗教研究所、2004、p.188）。なお、ルネ・ローランタンのベルナデッタに関する著書にも、このやりとりは記されている（ルネ・ローランタン、ミルサン・五十嵐茂雄共訳、『ベルナデッタ』(Laurentin, René, “*Vie de Bernadette*”, 1978)、ドン・ボスコ社、1979年、p.208-211)。

35 マルナス前掲書 p.119-120、及び、中島「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」、p.104-105。

36 彼女はサン・タンファンスのことなどでフォルカードと手紙のやりとりをしていた。また、帰国の際には、香港にある彼の姉 Sr.アルフォンシーヌの墓に咲いた花を、当時、エクス・アン・プロヴァンスのフォルカードのもとに届けようとしている。メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』、p.129。

ようになる。メール・バンジャマンは香港のみならずヴェトナムやマカオなどでも事業を拡大、各地に孤児たちのための育児院や寄宿舎、無月謝の学校などを開いた³⁷。

彼女がアジアで活躍していたのは、日本が開国し、横浜や長崎に天主堂が建ち、函館にも洋風建築の司祭館が建てられていながらも禁教下であった時期である。彼女は3年ほどシャルトルに戻るが、1869年には再びアジアに戻り、1870年以降、サイゴンに寄宿学校、育児院、貧民救済施設を、ショロンには病院と育児院を、ヴィン・ロンには孤児院と現地の人々のための病院を、ミトには民間病院を、タン・ディンには学校・保育所・授産所、ピエン・ホアには孤児院を開設するなど精力的に活動した³⁸。

1876年、ローマ教皇庁は、日本の司教となっていたプチジャンの要請を受けて南緯代牧区と北緯代牧区の2つに分けた。プチジャンは前者の司教となり、後者にはシンガポールや香港での経験も豊かで、パリ神学校で教師もしていたオズーフが着くこととなった³⁹。1877年2月11日、パリ外国宣教会の神学校の聖堂で、オズーフは、当時、エクス・アン・プロヴァンスの司教であったフォルカードにより叙階され、ローマからの帰路にあったプティジャンも立ちあった⁴⁰。このオズーフがシャルトル聖パウロ修道女会に、日本の北緯代牧区への会員の派遣要請をすることになる⁴¹。

実際、シャルトル聖パウロ修道女会の会員が日本に渡る約1年前の1877年6月、メール・バンジャマンは、ショファイユの幼きイエズス修道会の4人の修道女を伴ってフランスから日本に向かう途上のプティジャンに会

37 Gobillot 前掲書、p.139。

38 スール・マリ・ルチア（岩永）前掲書 p.62、及びメール・マリ・ポール・ボー『三世紀の生命』、p.68。

39 マルナス前掲書、p.486。

40 同上、p.486。

41 マルナスによれば、シャルトル聖パウロ修道女会の来日には、フォルカードも無縁ではなかったという。同上、p.117、及び p.491。

うことになった。プティジャンとオズーフはシンガポールで合流し、二人でメール・バンジャマンのところに立ち寄り、来日の計画を説明することになっていたのである⁴²。特にオズーフは香港にいたこともあり、シャルトル聖パウロ修道女会の極東管区長であるメール・バンジャマンのことはよく知っていた。1877年7月、オズーフはシャルトル聖パウロ修道女会の総長、メール・エリ・ジャレ Mère Elie Jarret に会員の派遣要請の手紙を書き、それと同時にメール・バンジャマンにも、函館での孤児院と学校と施療院の開設のための会員の派遣要請の手紙を送っている⁴³。1877年10月2日、シャルトル聖パウロ修道女会の本部はオズーフの要請に応えるため、マカオの寄宿舎を閉鎖して、日本に会員を送ることを決定した⁴⁴。

同年12月に、オズーフは総長宛の派遣要請受理に対する感謝の手紙を総長メール・エリ・ジャレに送り⁴⁵、翌1878年、三人の会員が函館に派遣されることとなった。函館ではオズーフと同じパリ外国宣教会のマラン Marin, Jean Marie に迎え入れられ、来日後すぐに、最初の修院長 Sr.マリ・オギュストのもと、Sr.カロリーヌが手芸を教える授産所を開き、2週間後には Sr.オネジムが無料の施療院を設けた⁴⁶。その数ヶ月後、メール・バンジャマンは、4人目となる Sr.マリー・エリーズ Sr. Marie Elise Billet を連れて函館の修道院を訪問し、本部の総長とルノー司教宛に、函

42 メール・マリ・ポール・ボー『メール・バンジャマン』、p.137。

43 Mère Marie Paul Bord, “*Cent Ans au Japon*”, Soeurs de Saint-Paul de Chartres, 1978, p.27-29.

44 「シャルトルのコミュニテ顧問会は、北日本に、シャルトル聖パウロ会の修道女の派遣をせつに願っておられるオズーフ司教の要請に応えるため、マカオの寄宿舎を閉鎖することを決定した。寄宿舎は1878年1月1日をもって廃止され、メール・バンジャマンの責任においてその筋にこのことを通知する。……顧問会は1878年の年内に、オズーフ司教に2～3人のスールを、送ることができる予定である」(シャルトル聖パウロ修道女会、『来日百年の歩み』、シャルトル聖パウロ修道女会日本管区、1978、p.6)。

45 Mère Marie Paul Bord, “*Cent Ans*”, p.29-30.

46 『盛岡白百合百年誌』、盛岡白百合学園、1992、p.30-31。

館での会員たちの報告を手紙で送っている⁴⁷。その後、オズーフは学校設立のための修道女たちを東京に招きたい旨をメール・バンジャマンに伝え⁴⁸、それを受けて、すでに函館で日本語を学んでいた Sr.カロリーヌとマリ・アスパズィー Sr.Marie-AspasieVENEL に加え、サイゴンで寄宿舎の仕事をしていた Sr.カンディドゥ Sr.Candide Cousin が派遣され、神田猿樂町に修道院を開設、これが東京の白百合学園の第一歩となった⁴⁹。

4. まとめ

本論では主に1848年から1878年の来日までのシャルトル聖パウロ修道女会のアジアでの歩みを概観した。1848年はアジアに最初の宣教女となった Sr.アンフォンシーヌが弟のフォルカードと仲間の会員たちと共に同会のアジア最初の地、香港に着いた年であり、1878年は三人の会員が日本に初めて降り立った年であった。この30年間の間に、特に、メール・バンジャマンのもと、シャルトル聖パウロ修道女会はアジア各地で、孤児院や養育院などの福祉事業、施療医や病院などの医療事業、教育事業を広げていくことになる。その背景にはフランスのサン・タンファンスや修道会の活動を支える支援や関心があったわけだが、たとえば、函館の大火がすぐさまサイゴンやシャルトルにも伝えられ、支援方法が模索されたり、パリ外国宣教会や日本の司教たちと共にビジョンの交換がなされるなど、幅広い視野が備わっていたことが読み取られる。

日本には明治以降、多くの修道会が来日しているが、極東・アジア地域、あるいは世界の他の場所とのつながりの中で日本が考えられていたことがわかる。日本におけるカトリックの教育や宗教教育を検討する際、どうし

47 メール・マリー・ポール・ボー 『メール・バンジャマン』、p.142。

48 Mère Marie Paul Bord, “Cent Ans”, p.37-39.

49 同上、p.40-41。

でもわれわれは日本の視点から、国内という枠の中で考えてしまいがちであるが、それによって見過ごされてしまう面も多いといえる。もちろん、現代、とりわけ第二パチカン公会議（1963-65年）後の視点から見ると、当時の文献や考え方の中に、時代の制約を強く受けた価値観が見て取れるのは確かである。しかしながら、中島も指摘しているように⁵⁰、その視点のみにこだわって見ることによって見えなくなってしまうことも多い。とりわけ、大きな時代の流れの中にあっても、目の前の一人ひとりに対する関わりを大切にしようとした、あまりにも当たり前すぎて歴史に残らない一つ一つの他者への共感、いのちへの配慮のために働いた無名の人々の見えない足跡は単純に否定できるものではない。

最初に来日した三人のスールたちも、Sr.オネジムはヴェトナムの施療院で働いた経験があり、Sr.マリ・オギュストは香港の修道院の責任者をしていて、シャルトルの本部アーカイブ長であり、会の歴史に精通している Sr. Jeanne Hélène が予め調べて下さったメモ⁵¹とインタビューによれば⁵²、最初に来日した会員の内、Sr.カロリーヌは数ヶ月アジアに滞在した

50 中島「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」、p.99。

51 「スール・マリ・オギュスト・ビアーとスール・マリ・オネジム・シャルバンはマカオから来た。1878年8月メール・バンジャマンは、スール・オネジムと一諸に病人の世話をしていたスール・マリ・エリーズ・ビエを「日本に」連れて来た。(Soeur Marie Auguste BIARD et Soeur Marie Onésime CHALVIN venaient de Macao. En août 1878, Mère Benjamin amena Soeur Marie Elise BILLET qui soigna les malades avec Soeur Marie Onésime.)」

52 2008年8月11日、シャルトル聖パウロ修道女会本部アーカイブでのインタビュー。「……必要に応じて、願われた場所にメール・バンジャマンはスールたちを送りました。このような状況のもとで、オズーフ司教様から依頼の手紙を受け取ったのです。すでにプチジャン司教様からも同じ依頼を受けていました。オズーフ司教様はシャルトルの母院にも同じ依頼の手紙を書いていました。1878年、メール・バンジャマンは日本に3人のスールを派遣しました。そのうちの2人は宣教地マカオから日本に行きました。彼女たちはかなり疲労していましたが、日本の気候のおかげで回復し、立派な宣教をすることができたのです。もう1人は、ごく短期間コーチシナに滞在した後、日本に行きました。彼女はフランスから直接日本に行ったのも同然です。それから少し経ってから、スール・バンジャマンは日本に

後すぐに日本に向かっていることから、フランスから直接来日したとも言えるが、他の二人の会員 Sr.マリ・オギュスト⁵³と Sr.マリ・オネジムはマカオから香港を経て日本へ渡った。すなわち、彼女たちはすでに実際にアジアで生活をし、その地の孤児院や施療院などでの経験を携えて、1887年5月13日、香港から横浜へと向かう船に乗ったのである。

蛇足ながら、最初に来日した三人の会員たちの船旅について触れておきたい。フランス郵船については澤 護⁵⁴の研究があり、最初の3人の会員が乗っていたタナイス号は1867年に le Ciotat で造られた船である。筆者たちは2008年、マルセイユの商工会議所文書館にある、マルセイユの「フランス郵船（メッサジュリ・マリティム会社 Messagerie Maritime à Marseille）」の船長たちが書いた報告書に接する機会を得た。Patrick Boulanger 館長により⁵⁵、フランス郵船の商（客）船タナイス号の船長ド・

行ったスールたちを訪問しましたが、その折、4人目のスールを連れて行きました。ですから、当初から間もない間にスールは4人になっていました。彼女たちは函館の気候をととても喜んだと思います。（“Soeur Benjamin envoyait des Soeurs là où on lui demandait. C'est comme ça qu'un jour elle a reçu une demande de Mgr. Ozouf. Mais, elle en avait déjà reçu une de Mgr. Petijean auxquelles on sait pas s'il y a une suite, pas gênant, mais Mgr. Ozouf s'est arrangé avec elle, et il avait aussi écrit à la Maison Mère de Chartres. Et un jour, Mère Benjamin, a envoyé au Japon en 1878, 3 Soeurs dont 2 venaient de Mission précédente à Maccao. Elles étaient assez fatiguées, mais le climat du Japon les a bien remises en forme. Et, elles ont pu faire une belle Mission au Japon. Et en même temps, elles avaient une Soeur qui était venue très peu de temps en Cochinchine, mais qui est venue pour le Japon. Elle venait presque directement de la France. Quelque temps après, Mère Benjamin est allée visiter les Soeurs et a emmené 4^e Soeur. Donc, très peu après le début, elles étaient quatre. Je pense qu'elles ont apprécié beaucoup le climat de Hakodate”）」。

53 1869～71年まで香港の修院の4代目責任者を勤めている。Chueng 前掲書、p.96。

54 澤 護、「フランス郵船と日本—1865年から1889年までの横浜寄港から—」、『千葉敬愛経済大学研究論集』第26号、千葉敬愛経済大学経済学会、1984、p.93。

55 2008年8月14日、同館でインタビュー調査を実施。

ラ・マルセル De La Marseille による、以下のような報告が示された（なお、
インクが少し消えているので読みづらいところがある）。

Monsieur le Directeur,

J'ai l'honneur de vous adresser le rapport de voyage n^{os} 12 retour et
14 aller que je viens de faire. J'ai quitté Hong-KONG le 13 mai,
à une heure du soir, je suis arrivé à YOKOHAMA le 20 mai à 3 heures
30 du matin. La durée de trajet a été de 158 heures et demie, la
vitesse moyenne de dix noeuds et le charbon consommé, 280.000 kilos.
Le nombre des passagers a été de un pour les premières, quatre pour
les secondes, un pour les troisièmes. Le nombre de colies a été de 6.
276 parmi lesquels 4.896 colies provenant de HONG-KONG et 1.380
colies provenant. La recette commerciale a été de, peut-être, 1.
806,71 francs pour les colies de HONG-KONG à YOKOHAMA.

Tous les divers services sont parfaitement fonctionnés, celui
notamment de la nourriture n'a rien laissé à désirer. Je continue à être
très satisfait de mon état majeur, dont je n'ai qu'à me louer. Chacun (il
parle de HONG-KONG) apporte son service, la part de zèle et de bonne
volonté. La meilleure harmonie règne entre les officiers et je me force
par tous les moyens possible de la maintenir.

Veuillez agréer Monsieur le Directeur, de mes sentiments les plus
respectueux.

Le Capitaine du TANAÏS
YOKOHAMA, le 27mai 1878
De la Marselle

帰路12番および往路14番の航海（注：商船（客船）の作業との関連で、航海にはすべて番号が付けられている）を終えて参りました。その報告書を送ります。……私は香港を5月13日、午後1時に出発し、5月20日午前3時30分に横浜に到着しました。行程にかかった時間は158時間半。平均時速10ノット。消費した石炭280,000kg。船客の数は1等船室にひとり、2等船室に4人、3等船室にひとり。積荷の数は6,276、うち4,896個は香港からのもの。1,380個…（略）…香港から横浜に運ばれた荷物の売上高はおそらく1,806.71フラン。…（略）…。種々の業務はすべて完璧に行われました。特に食べ物に関しては申し分ないサービスでした。…（略）…私は今でも、自分の負っているこの重要な立場に非常に満足しています。よかった、と思うばかりです。ひとりひとり熱心に善意を持って仕事に当たっています。乗組員たちはお互いにすばらしく調和した関係にあるので、私はあらゆる方法をもってこの雰囲気を持続するよう努めています。

敬具

タナイス号船長

横浜、1878年5月27日

ドゥ・ラ・マルセル

この報告書は船長によって書かれたものであるが、これに加えて、タナイス号のパーサーが1878年5月23日に横浜で作成した報告書もある。

Commandant,

J'ai l'honneur de vous soumettre mon rapport sur le voyage 12R, 14A du Japon que nous venons d'effectuer. Le service de bouche a bien fonctionné et les passagers ont été satisfaits de la nourriture, du

service. Approvisionnements tirés de l'Europe et reçus à HONG-KONG, ont été de bonne qualité qui nous sont arrivés en parfait état de conservation. Approvisionnement tiré des escales, Sur le résultat..... le petit nombre de passagers me paraît satisfaisant.

今、終えたばかりの日本への帰路12番および往路14番便に関する報告書をお送りいたします。厨房の業務は順調でした。船客は給仕されたものに満足していました。この食料はヨーロッパで調達されたものです。ヨーロッパで調達され、香港で受け渡されたものですが品質は良く、完全な保存状態で運んでくることができました。…（略）…船客は少数でしたが、満足しているように見えました。…（以下略）

これらのことから、マルセイユ商工会議所の文書館館長は、下記のように結論づけた。

Le capitaine nous donne le nombre des passagers. Ils sont malheureusement un petit nombre, mais c'est finalement une indication de la présence d'un petit groupe de passagers en seconde. Il y a eu seulement 4 passagers en seconde classe, une personne en première classe, et une pour la troisième. Donc, vraisemblablement les passagères que vous recherchez ont voyagé ensemble en seconde classe. Et voilà donc le document qui fait foi de leur passage.

船長は乗客の人数を記しています。乗客の人数は残念なことに僅かですが、この2等船室に少人数のひとグループがいたことを示しています。2等船室に4人、1等船室に1人、3等船室に1人が乗っている

ました。ですから、あなた方が探している方たち（注：来日した最初のスールたち）は、おそらく、2等船室で一緒に旅をされたと思われます。この資料はその方たちの渡航状況を確認してくれます。

ちなみに、彼女たちが乗った船が「タネ号」とされている記述が時折見られるが、正確にはタナイス号（Tanaïs）である。翻訳、あるいは何か書き写す際に、i の上の “~”、すなわちトレマ（tréma, 分音記号）が



タナイス号（マルセイユ商工会議所文書館所蔵）

落ちてしまい、「タネ」と読まれたと思われる。同文書館に保存されている写真にも TANAÏS とある。最初の三人の会員は香港で合流し、このタナイス号に乗って横浜、そして、未知の地である函館に向かったのである。

おわりに

最後に本研究の背景について述べておきたい。宗教系学校の教育について宗教学の立場から共同研究に関わる機会を得てきた佐々木は、共に宗教科目の授業を担当していたことから、本学のスール・岩永とこの分野についてしばしばお話をすることとなった。ご自身が長年奉職なさった八代白百合学園の百周年が目前であったこともあってか、スール・岩永は、ご自身がかつて編集された修道会の歴史に関する著作の記述を訂正し、書き直したいといつもおっしゃっていた。ちょうど日本におけるカトリック系学校の歴史的研究に従事していた時であったので、一緒にその作業を始めましょう、とお話していた矢先、スール・岩永が突然、帰天されてしまわれた。その後、スール・岩永とのお約束をずっと実現することができずにい

たが、小林・佐々木は2008年、シャルトルの母院とパリ外国宣教会のアーカイブ、ルルド、マルセイユなどへ調査に向かう機会を得た。その後、佐々木が体調を崩していた数年の間、小林は映像資料等のディクテーション及び翻訳を続け、今回、その一部を公にすることにした。この場をお借りして、今回の調査においてお世話になった関係各位、特にシャルトルの母院の修道院長 Sr.Xavier、Sr.Claire Hélène、同アーカイブの Sr.Jeanne Hélène、ルヴェヴィールの資料館のスール方、サン・シュロン修道院のスール方、面接調査に応じてくださった Sr.Silvain、パリ外国宣教会本部アーカイブのご紹介の労をとって下さった日本管区長の Olivier Chegaray 師、マルセイユの商工会議所文書館館長 Patrick Boulanger 氏、また、フランスとの細かい調整を忍耐強く引き受けて下さったスール・戸荊、フィリピン管区アーカイブで歴史資料の扱いについてご教示下さった Sr.Flor 及びルヴェヴィールでのインタビュー調査をボランティアで引き受けて下さった中井珠子先生、そして天国にいらっしゃるスール・千石に御礼を申し上げたい。どの援助がなくてもこれらの細かい作業は成立しなかった。心より感謝申し上げる次第である。

なお、本論は日本学術振興会科学研究費助成金（課題番号19520065 2007-2009）による研究成果の一部である。